

信州読書会 ツイキャスト読書会

課題図書 カミュ 『異邦人』

信州読書会では、毎週、ツイキャストをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャスト <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャスト読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャスト読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 32 回のツイキャスト読書会の課題図書は、アルベール・カミュの『異邦人』です。

[『異邦人』については、以前解説しています。](#)

[ルキノ・ヴィスコンティ監督で映画化もされています。](#)

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『真夏に汗をかきながら海辺で読みたい小説』

一般人には非難されるのですが、ムルソーはムルソーなりに母親のことをきちんと考えていて、そんな変な人間とは思いませんでした。

アラビア人の銃で殺害についても、結局はレエモンを怪我させたアラビア人にムカついて殺害したんだと思います。

追い撃ちの4発は、その時の感情というか勢いだったんでしょう。

またムルソーは、他人に無関心な感じが会話の節々で感じました。

例えば、「そうです」「ええ」「理由はありません」など会話がめんどくさいから、短い返事にすることで無関心ぽさが出ている。

この小説は、アラビア人の殺害よりも、ムルソーが母親に対して不謹慎であり、さらには無神論者であることで死刑になってしまう。

当時のアルジェの無神論者がどれぐらいいたのかわかりませんが、異邦人というぐらい余程珍しいのかなと想像しました。

もし母親の死とアラビア人の殺害が逆だったら、ムルソーは逆に助かっていたのかもしれない。

でも、銃で倒れたアラビア人に追い討ちで4発撃ち込んでしまうから、正当防衛ではなくなり結局は有罪にはなって司祭に説得され、またブチギレと思うので結果はあまり変わらないかもしれない。

ムルソーは、他人のことを見ていないようで、よく周りを観察している人で、自分が嫌いな人に対しては、徹底的に冷たい。

そのピークが153ページの「私の内部で何かが裂けた。」と、エクソシストの悪魔のようなブチギレ具合が何度読んでも凄まじい。

ムルソーは自分の感情にあまり嘘をついていないと思うので、神を信じるぐらいなら、あえて死を自分から望んでいるようにも思えました。

ド派手な死を希望しているムルソーには、二都物語のギロチンを差し入れしてあげたいと思いました。

中村文則さんの作品はムルソー的な人物を継承されているので、興味のある方は読んでみて下さい。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

異邦人—L'Étranger アルベール・カミュ 読書感想文

今日はこれで終わりです。アンチクリストさん。

救いの手は差し伸べられなかった。その手が神のものでも、裁判長のものでもよかったのに。

「汝、殺すなかれ」。キリスト教のもと、罪を犯した人が行き着くのは最後の審判。神の加護は信仰している者のみに与えられる。人が人を裁くとき、情状酌量の定義はどこに帰属しているのだろう。裁判の論点が、現実の罪から信仰の不在へとすり替えられてゆく。夏の太陽に照りつけられた母の埋葬の日と同じく、抜け道のない教会への道が延々と続いていた。裁判が始まる前から運命は定められていた。陪審員が納得する酌量の材料は一つも見つからなかった。溝は最後まで埋まらない。

ムルソーは偶然、不幸のとびらを開けてしまったのか。ノックする音は銃声5発と同じく聞こえた。太陽のせいだった。それまで幸せな気持ちに満ちていた海辺でその後のすべての自由を奪われた。自由に無自覚だった自分を一つ一つ紐解きながら、ママンの言葉を思い出す。人間はどんなことにも慣れてしまうもの。それは命への諦めへ通ずる。

口数の少ない彼は必要のない言い訳は決して言わない。独房の壁の前で、無神論者が受ける社会の不条理をいくら問おうと、ムルソー自身では答えは出せなかった。一つの価値観、宗教観に縛られた社会で、人は群衆になると凶暴になる。ムルソーがギロチンに掛けられるとき、最後に望むのは群衆からの憎悪の言葉だった。優しい世俗の無関心へのアンチテーゼであったはずだ。心をひらいた、とあったが、理解されることを諦めて死に向かい合った孤独が生きる方法は、ただ真っ直ぐであること。自分にも人にも。その結果の死もまた偶然だったのか。

それが異邦人ということであり、或る男の意志をまっとうした誠実さだった。問われた問いに、皆答えられるだろうか。

(おわり)

『異邦人』の感想文

カミュの「異邦人」を初めて読んだ。読んでみて感じたのはマイノリティに対するマジョリティの暴力で描かれているということだ。

ムルソーは友人のレエモンが敵対していたアラビア人を、出くわしたときにたまたま拳銃を持っていたばかりに弾みで殺害してしまう。その後の取り調べや裁判でムルソーが養老院の母が亡くなったときに悲しむような態度を見せなかったことや翌日にマリイとデートしたことなど、上記の殺人とは直接的には無関係の理由から非人間的とみなされ、それ故悔恨の情なく、情状酌量の余地なしと判断され、ギロチン刑に処せられる。

ムルソーはもともと全ての物事に対して心理的距離のある、淡泊でこだわりを持たない性格の持ち主で、しばしば誤解を受けるが、誤解を受けたことに対しても訂正しようとしないため、一般的な世界との間にズレができてしまっている。この相違を人間界と非人間界と呼ぶことにする。

弁護士もムルソーの弁護をしようとするが、人間界の論理で動いているため、結果的には同じ人間界の裁判官や検事の側に与することになる。マリイやレエモンも証人として裁判に出廷するが、彼らがいかにムルソーを擁護する発言をしようとも、結局はムルソーが非人間界の住人であることの証拠を補強する材料として使われてしまう。

さらに、死刑が確定した後も司祭がムルソーを更生させようと(人間界の住人になるよう)繰り返し説得しに来る。しかし、ムルソーはそれを拒絶し、非人間界の住人のまま死刑に臨む決意をする。

上記のように誇張して描かれてはいるが、社会の様々な事柄(LGBTや少数民族、宗教対立の問題など)でマジョリティの暴力は横行しており、マイノリティは声を上げるが、その声は虚しくもマジョリティの大声によって掻き消されてしまう。

マジョリティは空気の存在のように自身の正当性を自明のこととし顧みない。この作品を読むことで自分がマジョリティ側にいる事柄は何だろうかと考えてみる。

(おわり)

『異邦人』 読書感想文

アラビア人に出くわす二度目の浜、太陽と、泉のせせらぎと葦笛の三つの音を含むこの沈黙、とあります。この太陽は圧倒的で、頭の中だけで鳴り響いている音と想像しました。狭い距離に敵同士4人居合わせ、緊張感がすごく伝わります。そんな状況ですがムルソーは敵の一人の足指が開いているという細かいところまで、冷静に洞察しています。レイモンは先に仕掛けようとしませんが、ムルソーは自分がよせと言うと、レイモンが逆上してしまうという心理を見越し、攻撃態勢じゃない相手を撃つのはきかないと言って、一旦レイモンを止めます。それでもレイモンが少し興奮してきたので、敵が攻撃してきたら素手で向かうように助言し、拳銃をレイモンから預かります。一切がわれわれの周りを閉じこめているような沈黙は続きますが、出し抜けにアラビア人は後ずさりして逃げ、レイモンの気分はよくなります。

ムルソーはヴィラには戻らず、太陽や骨折りや女たちの涙から逃れて、岩かげの涼しい泉に影と憩いを求め、再び浜を歩き回ります。理想の岩かげを見つけ、ホッと一息つけると思ったら、そこに例のレイモンの相手が、あおむけに寝て憩んでいるのを、見つけてしまいます。自分が、回れ右をしさえすれば、それで事は終わる。とムルソーは考えますが、太陽からは逃れられず、身を起こさず威嚇目的で七首を構えるアラビア人に向かって、さっきレイモンから預かった拳銃の引き金を引いてしまいます。

友達に拳銃を使わせないように細心の注意を払っていたムルソーが何故、不必要に自身が使ってしまったのか？ 私には、どうしてもわかりません。レイモンも、気が済んでる感じです。第1部の6章は、人が合理的ではない行いをしてしまう、物理的な力がもしかして、太陽にはあるんじゃないかと思ってしまう迫力のある文章に感じました！

(おわり)

外から守るか内から守るか

神を信じない主人公が、「太陽のせい」で一人のアラビア人を撃ち殺し、喪に服さない態度や無神論者である自分を曲げないことで、人を一人殺したこと以上の罪を償うことになった物語。

「きょう、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かもしれないが、私にはわからない」 (p. 6)

加えて母親の年齢も分からなく、死体置場で喫煙する主人公。ママンとは養老院に入れたときに縁を切ったのかもしれないし、過去に学問を諦めたことが糸を引いている可能性はあるが、大衆としては関係ない。いつまでも親は親だ。

友人から手紙の代筆を頼まれ、彼を満足させないという理由は別にないということで手紙を書き、自分は愛しているとは言えない相手でも、断る理由はないので彼女が望むならと結婚を承諾する。

身近にいたらちょっと変わった人という印象を植え付ける。

ただ、一人の人間を殺したことで裁判を通じ人間性が明るみになってしまい、それが重い判決へとつながっていく。彼は最後まで自分を曲げず守り切った。

不都合が想定されても本当の自分を守るのと、面倒ごとを避けるため本心とは違うが本当の自分を曲げるのと、どちらが良いのか。

「申し訳ありませんでした」とだけ言えば、それを微塵に思っていなくても放免されるとしたら、多くの人を選択するのは後者だろう。他人と対立したくないし、そこまで確固たる自分を持つ者は少数ではないか。

しかし、信念を確立している人にとって、自分を曲げることは考えられないのかもしれない。想像を絶するストレスや苦痛が待ち受けているのかもしれない！ 結婚発表したアイドルだって、「あなたたち（一般人）には関係ないし、恋愛なんて禁止できるものではない」ともっと突き抜けていたら、より叩かれるのは必至だが、本当の自分は守られる。当然坊主にして反省を見せつけない。外から自分を守ることを捨て、内から自分を守る。

そうすれば、「処刑の日に大勢の見物人が集まり、憎悪の叫びをあげて、私を迎える」 (p. 157)

(おわり)

『ムルソー、驚くべき人』

これまで読んだ小説は、登場人物がこの世の絶望から救われるために神の信仰に入っていく印象が強かった。しかし、ムルソーにとっては、この世に生きる意味付けとしての神は全く不要だった。神を信じようが信じまいが人はあらかじめ特権を持っている。それは、誰しものが他の誰からもその価値を規定されない存在である特権。神の加護を受けない特権。(ムルソーにとって、神の加護さえも神から選ばれた特権を付されるものであった。)

検事は言った。「私はこの男に死刑を要求します(後略)。」

検事は、ムルソーを説明するには自身の経験や認識の範囲を超えていた。だからムルソーに恐怖を感じ、検事の職権でムルソーをこの世から抹殺した。

一方、他者がムルソーをどう表現しようが、彼には彼の真実があった。ムルソーにとって…母は施設に入ったほうが幸せだった。母の死を悼むこととマリイとの蜜月は関連性のないものだった。殺人の理由になり得るほどに皮膚感覚が敏感で、強く照りつける日射しが骨身にこたえていた。

そのようなムルソーの価値観は、法廷や大衆から強く拒否される。ムルソーは結局のところ殺人の行為よりむしろ神に無関心であることを断罪されたのだった。法律や法廷、宗教など国家が造った「メカニックなもの」は、個人と他者の境界もなければ課題を分離してもいない。情状酌量という概念が示すように、法という衣をまとった「人一般」の価値観による断罪なのだ。

ムルソーには、「メカニックなもの」は彼の足首にかけられた鎖だった。鎖が断ち切られる死の瞬間を連想すると『全く生きかえったような思いがしている』ほどに忌まわしいものだった。

しかし、確かにムルソーに神はいなかったかも知れないが、彼を見つめている、彼自身も意識している存在が別にあったのではないかと私は思っている。ムルソーは陽の光に満ちた空をいつも感じていた。ママンの埋葬の時も、マリイとのビーチのひとつときも、アラビア人を殺めた瞬間も。陽の光はムルソーにとって気がつけばいつも物理的にそばにあり、何も言わずにそこにいて、時に誇示する力が強すぎ足かせにもなるような存在だった。

それって結局神じゃないの？とツッコミを入れられそう。ムルソーが信じようが信じまいが神はついていて、なんておせっかいな考えにしがみつくと私もまたムルソーの足にひっかかっている鎖なのだろう。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 It' s quite simple 』

今回、ムルソーに逢うのは二回目だ。初めて出逢った際は、「不条理」とされるムルソーに距離を置いていた。たぶん、この小説の検事や弁護士、御用司祭、養老院院長と同じ目線だったろう。しかし、ムルソーからすると周囲のほうがよくぽど不条理だったということに気がついた。ムルソーは、極めてシンプルに生きていただけなのだ。義理や演技、信仰や同調圧力など、およそ人間が背負っているものを何も背負わず手ぶらだった。そういうものを限界まで背負い込んでいる私にとって、ムルソーが少し眩しく見えた。

ある意味、丸腰なムルソーは身近な人も傷つけてしまう。マリィと関係を持ちながら「愛してないと思う」と言い、別の女の結婚の申し込みに承諾するか？ には「もちろんさ。」と答えてしまう。決して、嘘はついていない。ただ、愛するふりをしなかっただけ、マリィのことを愛していたのかもしれない。彼にとって大事なものは、この世の森羅万象と自分自身、そして本能だ。無駄な感情や神が入る余地はない。だからこそ、他人に対してもひどく平等だ。レイモンやサラマノに対してもだ。

ママンの死も、ムルソーにとっては受け入れられているだけなのだが、「悲しみ」の感情が見えないだけで死刑へつながってしまう。私自身、葬式の際、「悲しまなければならぬ」と思っていなかったかを考えるとぞっとする。現象をそのまま受け入れるムルソーにとって、銃の引き金を引く際、絶対的な現象の太陽のせいであったことは、彼にとっては「条理」だったのだと思う。

人間から、信仰や余分なものを極限までそぎ落とせば、ムルソーになるのかもしれない。でも悲しいかな、現世ではまだ受け入れられない…。

養老院の看護婦が言った「ゆっくりいくと、日射病にかかる恐れがあります。けれどもいそぎ過ぎると、汗をかいて、教会で寒けがします。」にムルソーは「彼女は正しい。逃げ道はないのだ。」と思った。

人生にだって、逃げ道はないのだ。彼は自らの罪と死を受け入れることによって、幸福を感じる。孤独を恐れなかったムルソーが死刑の際の大勢の見物人と憎悪の叫びを求める。無関心でさえ「優しい」と感じた心境に、いびつだけれどちよっぴり安心した。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『世界の優しい無関心』

アラビア人に一発目と二発目に間を置いて、残りの四発を撃ち込んだことは、明確な殺意があると思われるが、それでも、無期懲役がいいところで、情状酌量の余地がある。

では、なぜ、ムルソーは死刑になったのか？

ここが、この作品のテーマである。

第二部の裁判では、ムルソーの『精神の自由』が裁かれている。

日本国憲法第 19 条には『思想及び良心の自由は、これを侵してはならない。』とある。

(2012 年の自民党の改憲草案では『思想及び良心の自由は、保障する。』になっている)

「良心の自由」とは、精神の自由である。国家権力は国民の『精神の自由』を侵してはならないというのが、近代国家のルールだ。共謀罪の議論もここが焦点だった。死刑制度の問題もここにある。(国家権力がなぜ、我々の精神の自由を保障できるのだろうか?)

ムルソーは、精神の自由を守るために、御用司祭を追い払った。

しかし、この小説の世界が、『1984 年』と同様の超管理社会であり、御用司祭が、オブライエンだったらどうだろう。ムルソーは、愛情省 101 号室で、『マリイになら何をしてしても構わない!』と叫ぶまで、拷問されつづけるだろうか？ 残念ながら、それはない。皮肉なことに、ムルソーはマリイを愛していないので、この拷問の意味はない。

むしろ、拷問されているのは、マリイである。

「あなたがでたら、結婚しましょうね!」とってくれたマリイこそが、ムルソーの精神の自由のため拷問にあっている。

遠藤周作の『沈黙』の『穴吊りの刑』さながらだ。穴吊りにあっているのは、マリイである。この御用司祭は、ロドリゴに棄教を迫るフェレイラのようなものである。

特赦を餌に改宗を迫る御用司祭は、文字通り『権力の司祭』だ。

ムルソーを死刑から救えなかったマリイは、この一件で十分、傷ついた。

これから人生で、誰も人を愛せなくなってしまったかもしれない。

ムルソーがさっさと神を認めれば、マリイは救われるのに……。

彼は、精神の自由を守るため、マリイに無関心なのだ。

『世界の優しい無関心』とは、このことだ。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください http://bookclub.tokyo/?page_id=2343